

駐日ハンガリー大使館主催
『異星人伝説』出版記念会より

駐日ハンガリー大使

セルダヘイ・イシュトヴァーン

ハンガリーの物理学者マルクス教授が、ハンガリーの偉大な科学者の伝記を描いた『異星人伝説』を出版されました。英語版は『The Voice of the Martians (火星人の声)』という表題になっていますが、これをここにいらつしやる盛田さんが日本語に翻訳なさいました。ハンガリーの科学・科学者にかんする本が出版されたことを皆さんに紹介すると同時に、現在の科学の状況をアピールするために本日の会を催すことにしました。

それぞれの国はそれぞれ優れた科学や科学者を輩出していることは言

うまでもありませんが、その中でも、ハンガリー人は普通よりちよつと優れているという評価を受けています。そのことが本当かどうか分かりませんが、この本を読むと良く分かると思います。

先週、ハンガリー投資セミナーを行いました。企業の皆さんに来ていただいて、ハンガリーは投資するのに適していることを宣伝したわけです。その中で日本の経済人の一人から次のような話がありました。「ハンガリー人は民族的に頭が良くて、発明・発見で良く知られ、ノーベル賞受賞者もたくさん出しているけれど、われわれが必要なのはそのような人ではなく、勤勉に大人しく仕事をしてくれる人なのだ」と。半分冗談にこのように話されました。

このような評価をめぐって、私と経済担当参事官との間で意見が分かれています。参事官は、科学や学術の水準の高さを強調するより、

ハンガリー人の勤勉さとか、ポーランドのように組合を作ったりせず、大人しいということを強調した方が良いという意見でした。しかし、私は違うと考えます。そのような意味での投資も大切ですが、やはりわれわれの科学・技術の伝統を積極的に宣伝していくのが、私たちの仕事だと考えます。参事官が納得したかどうか分かりませんが、このような出来事がありました。

もう一つ重要な事柄として、今年七月に予定されている天皇・皇后陛下のハンガリー訪問があります。現在、ハンガリー滞在中のプログラムが検討されていますが、ほぼ決まったプログラムが一つあります。それはハンガリー科学アカデミーに出いただきたい、ハンガリーの科学者と自由にご歓談いただくことになるところだと思います。吉川先生ともたいへん親しいクロオー・ノルベルト教授が科学アカデミーの事務局長を

されており、クロー先生を初めとするハンガリーを代表する科学者とご歓談されるというプログラムは、ハンガリーの特徴を活かしたもので、他の国との違いを浮き彫りにするという意味もついています。

こういうことで、本日、出版記念の会に皆さんをお呼びいたしました。あらためて、本日のご参加に感謝し、最初のスピーチである吉川学会議長にバトンタッチしたいと思えます。

日本学会連合会長

吉川 弘之

一つの国を知るといのは難しいと思います。ハンガリーには立派な科学アカデミーがあります。日本と違って、ハンガリーは科学者・技術者を大切にす国です。しかし、科学アカデミーとの付き合いだけでは、なかなかハンガリー人科学者の特徴が見えてきません。幸い、私は三〇歳前後の若い時分から国際会議を通して、ハンガリーの研究者と知り合う機会がありました。いろいろな付き合いを重ねるにつれて、具体的な印象をもつことができました。国や国民を知るといのはそう簡単なことではありませんが、私の場合はたまたま個人的に付き合う関係ができ、そこからハンガリーの研究者・技術者についてのいろいろな印象を得ることができました。私はエンジニアリングが専門ですからその

喩で言うのですが、たとえば彼らは機械工学の専門家だと言われることを嫌うことが分かりました。つまり、まず自分は科学者である、技術者であるという幅の広い考えもっているのです。そこから出発しているわけです。

私自身の個人的なことで言いますと、二〇代から砥石の研究を行っていました。砥石の減り方などの計算をやるわけです。ところが論文を仕上げたみて、いったい自分は科学の知識の中でどれほどを知っているのだろうかと自問しました。計算してみると、すべての知識の七万分之一ほどしか知らないということが分かり、いったいこの一〇年間に自分は何をしてきたのだろうかと考えてしまったわけです。そこで科学の是非、科学の領域について、非常に疑問を抱くことになりました。専門を変えることになります。

こうして三〇代半ばに一般設計学

という領域に入り込むことになりました。設計には機械設計や建築設計などいろいろな設計がありますが、それらの設計を横断的にカバーする

共通性を対象にする「一般設計学」というものを考案し、それを専門にしようと考えたわけです。そこで一九八六年にある国際会議でそのことを提唱したら、猛反対に会いました。設計というのは個別具体的なものと主張です。一般設計学などありえないという主張で、とくに日本の学者からの反対が強かったのです。その中で、唯一、私の構想を支持してくれたのが、ハンガリー人研究者でした。彼はコンピュータサイエンスの専門家ですでに亡くなりました、歴史家でもあり哲学者でもあるような人物で、一緒に歴史研究をやるなどという人でした。非常に幅の広い考えを持っていて、ふつうに話していたのでは、彼がコンピュータサイエンスを専門にしていることがま

ったく分からないのです。そこから分かったことは、ハンガリーの科学者には領域否定という発想が非常に強くあるということです。

実はこの領域否定という課題は非常に重要な科学の現代的な課題で、これまで科学が領域を細かに設定してきたために、領域相互の意思疎通がなくなり、地球環境を汚染してきたと考えるからです。したがって、これらの分断された領域をどう総合していくのかは、非常に現代的な課題になっていくのです。

もう一つ、ハンガリー人に共通する特徴があります。ふつう科学者は一つの領域のなかで説明されていない課題を見つけ、それをどう解くかという分析に取り組み、それがうまく成功すればノーベル賞の対象になるわけです。ところが、ハンガリー人科学者の考え方は、どうもこのような主流の考え方とは違ふところにある。もちろん主流にある科学者も

いるわけですが、主流から外れた考え方をする人が多い。つまり、自分で一つの領域を創り出してしまふのです。ふつう一般の科学は分析するだけではないのですが、ハンガリーの人たちにはそれをどう使うか、科学の意味まで考える人が多いのです。これは科学の応用にまで関心をもっているとも言えるのですが、そういうことではなしに、得られた人類の科学的知識によって人類がどうなっていくのかということまで関心をもっているということなのです。この点は現代の科学にとつてたいへん重要な事柄であるわけです。

われわれの科学的な知識は、ある対象をいろいろな側面から分析することによって獲得できます。電気な性質、あるいは機械的な性質など、いろいろな法則を導きだすことができます。単純な現象から多くの法則群が導かれて科学的知識になります。それは機械的な法則であったり、建築的な

法則であったりするわけです。他方、たとえばコップを作るうという段になると、今度はいろいろな法則を使って、現実の物を作ることになります。これはいわば科学の逆工程になるわけです。

しかし、人類の知識にとつて、この両方があつて完成すると考えます。科学がこれまでやってきた法則群を作るといふのは、科学の半分ではないと考えるのです。私自身、法則群を使つてどうやって物を作るのかという仕事をしてきたわけですが、このいわば「後半の科学」というのはまだ未完成です。ハンガリー人科学者の中には、この「後半の科学」について大きな考えをもつて、それを予感しながら研究している人が多いと考えます。

まとめますと、ハンガリーの科学者は学問の領域固定を嫌う非常に学際的な傾向があること、もう一つは知識の全体について常に関心をもつ

ているということだと考えています。科学が人類に恩恵をもたらしてきたことは疑いありませんが、問題があるとすれば、科学的知識が個別の領域に分断され、バラバラに発展してきたために、人間の行動の全体的な調和がとれなくなっていることにあると考えています。まさに現代の科学はこの調和をどう回復するかというところにあるわけですが、そのことを考えるためにも、『異星人』の声に耳を傾ける必要があると考えるのです。

早稲田大学理工学部教授

フランクフルト・ピーテル

私がハンガリーから日本に来たのは二〇年も前です。日本は素晴らしい国だと今でも思っています。素晴らしいことがたくさんある国だと思っています。ですから、日本がハンガリーに見習うことは何もないと考えていますが、一つだけ言わせてもらえば、ハンガリーでは昔から英才教育が盛んでした。それは日本も学ぶ必要があるのではと考えています。日本の一般的な教育レベルは非常に高いと言えます。最近では教育の現場が荒れているとかいろいろ言われていますが、それでも日本の教育の一般的なレベルはハンガリーと比べても、また欧米諸国と比べても、はるかに高いと言えます。これは歴史的な理由があり、明治維新以降の学校教育政策が働いていると思います。この政策の目標は生徒全員の教育レ

ベルを同じように上げることにより、たとえばクラスで見ると、一番遅れている生徒に合わせて授業をするというようなことに特徴的に現れています。

これにたいして、ハンガリーの教育の平均的なレベルはそれほど高いとは言えませんが、一番トップクラスにある人たちへの教育は非常に盛んで、高いレベルにあると言えます。ここにある『異星人伝説』で取り上げられている人たちも、やはりハンガリーで英才教育を受けた人たちなのです。それは具体的にどういうことか、私の個人的な事例で、つまり戦後のハンガリーの教育経験でお話ししたいと思いません。戦後のハンガリーでも、いくつかのエリート校がありました。数学とか、物理とか、化学とか、とても特別な教育をおこなう学校がありました。今でもそれは続いています。もしハンガリーが日本に貢献できることがあるとすれ

ば、ハンガリーが設立メンバーである数学オリンピックのような行事に、日本がもっと盛んに参加することだと考えます。ハンガリーは設立以来、このコンテストに参加していますが、ハンガリーの代表チームのメンバーを見ると、同じ学校から四・五名参加することが良くあります。もちろん、それは数学の英才教育を行っている学校の生徒です。歴史を辿ってみると、ハンガリーでは世界で初めて全国的な規模での数学コンテストを始めた国でした。『異星人伝説』に出てくる人々の多くも、このコンテストに参加し、自分の才能に目覚めたり、確信をもったりした人々たちです。これは今でも変わりません。現在も、ハンガリーでは各種のレベルの数学コンテストがあります。日本でも最近はそのようなコンテストがありますが、ハンガリーの特徴は、多くのコンテストで教育省が受け皿になっていて、ほとんどの学校が参加し、

先生方は数学や物理、あるいは化学で優秀な学生がいれば、積極的にコンテストに出場するように促している点です。学校から一人でも優秀な生徒を送り出そうと頑張るのです。学校レベル、地区レベル、地域レベル、全国レベルの各種の予選・決勝があります。このようなコンテストに参加する生徒の数は日本の生徒数よりはるかに多いと思います。ハンガリーの人口は日本の二分の一ですが、このようなコンテストに参加する学生の数ははるかに多いのです。

日本でも英才教育的な学校があります。麻布とか開成とか、その他の有名校で数学ができる生徒がいます。ところがハンガリーと違う点は、数学ができる子がいたら、担任の先生は、「君は数学が良くできるからもう数学をそれほど勉強しないで、国語や英語に力を入れなさい」というのです。ところが、ハンガリーで良く

できる子がいたら、先生はその子にたいして、「それをもつとやりなさい、力を入れてやりなさい」と奨めるのです。コンテストに参加し、優秀な成績を収めることは学校の名誉になることです。先生も学校も、生徒の才能を最大限に発揮させるように、コンテストへの参加を奨めるのです。それは数学だけでなく、たとえばロシア語のコンテストなどでも同じことです。とにかく、ハンガリーには、教科に対応したあらゆるコンテストが存在するのです。そして、それぞれのコンテストで優秀な成績を収めた者については、一部の大学で入学試験が免除になります。私が勤務している早稲田大学では、数学オリンピックで優秀な成績を収めた学生には同じような措置をとっています。ハンガリーでは国立大学でそのような措置がとられています。

そういうことで、私が日頃思っ

ていることは、日本がハンガリーに見習うことがあるとすれば、それは英才教育だろうということです。この面でも、もつと日本とハンガリーとの交流があればと考えています。

一つ個人的なことを話させていただければ、『異星人伝説』の中に数学者のエルドゥシユがいます。彼は40歳年上で、同じ日に生まれています。彼は私の大先生です。彼の素晴らしいところは、財産を一切持たなかったことです。今の日本はアメリカの影響を強く受けていて、アメリカ的な価値基準ではその人の価値はその人の財布にあると考えられています。つまり、どれほどお金を持っているかで、その人の価値が決まるというような価値基準です。それによれば、エルドゥシユ先生の価値はゼロになってしまっています。彼は財布すら持っていないでした。小さな鞆と大きな鞆を抱えて全世界を渡り歩き、旅先で数学者たちと交

流したのです。エルドゥシユ先生は私にもつとも大きな影響を与えた数学者で、私が誇りに思っていることは、彼が最初に日本を訪問した時に、私が彼を案内できたことです。

エルドゥシユ先生だけでなく、ハンガリーから出た素晴らしい学者がいます。『異星人伝説』にはそのような人々が描かれていますので、是非、これを読まれて、日本がハンガリーから見習うことが発見できれば、素晴らしいことだと考えます。

元上智大学理工学部助教授

笠 耐(りゅう・たえ)

縁があつて東大教養学部に勤め始めました時期には、フラインマン物理学やパークレイ物理学などの新しい潮流が生まれてきました。当時の教養学部の物理学教育は少し物足りない感じがしましたので、もっと教育の問題を考えて見たいと考えるようになりまし。一九七五年に英国のエンジンバラで物理学教育の国際会議がありまして、それは今から見ても規模の点でも、また今日の教育の問題を包括的に提起している点でも、もっとも重要で大きな会議でなかつたかと考えています。そこで今日の物理学教育の世界的な指導者とめぐり合う機会があり、マルクス教授とも出会うことになりました。

まず。そういう経緯があつて、湯川秀樹博士を初めとして、日本に友人が多く、京都大学の基礎物理学研究所の客員教授をも務められました。本日ここに出席されておられる素粒子物理学の小沼通二教授(元日本物理学会会長)や宇宙物理学の佐藤文隆教授(学術会議会員)も、マルクス教授の友人であります。

昨年、英国で出版されました英国物理学協会が作成した世界で最も新しい、一六・一九歳を対象にした物理学コースである『アドヴァンスイン物理学』のテキストにも、宇宙の暗黒物質にかんする章で、ニュートリノの質量を最初に概算したのはマルクス教授たちであったことが書かれています。もちろん、ニュートリノの質量の予測については、当時と現在とは随分内容が違うのですが、そういうアイデアを出したことが評価されているわけです。

マルクス教授は一九六〇年代から

中等教育における物理学教育の改革に力を入れておられ、一九七五年のエンジンバラ会議の後、毎年、ハンガリーで物理学教育の国際会議を組織されてきました。「ダニューブ・セミナー」をはじめ様々な国際会議には、西欧東欧を問わず、多くの科学教育者が参加してきました。私も一九七八年に日本の物理学教育の話をして欲しいと言われ、参加しました。以後、何度も参加しましたが、この会議の特徴は著名な物理学教育者に混じつて、ハンガリーの高校の先生方が多く参加されていることです。経済的な理由で、高校の先生が海外に出かけるのが難しいので、著名な物理学教育者を海外から呼ばれてそこに高校の先生方を招待されるという形をとつてこられました。会議ではマルクス教授自身が通訳の仕事をされ、会議の合間やセミナーの後に組織されたツアーにも、ガイドとしてハンガリーの歴史的な名所を案内されるの

が常でした。また、マルクス教授は第三世界の教育にも熱心で、呼ばれればどこへでも出かけるという気さくで行動力のある、私にとって尊敬してやまない先生です。

マルクス教授の片腕として物理教育で活躍しているトート・エステルが、マルクス教授のアドヴァイスを受けながら作成した高校生向けの教科書があります。高校の最上級年で教える「現代物理」と題する教科書です。京都で高校の教師をしている私の息子が生徒と一緒に読んでみるとなかなか面白いことが分かりました。そこで、これを息子と一緒に訳しました。語学が得意でないものから『異星人伝説』のようにうまく訳せていないのですが、今日、ピーター・フランク先生にお会いすると息子に話しましたら、是非、一部差し上げてくれというものですから、これを持ってきました。

これは丸善から三分冊で出版され

ており、統計物理、原子物理、原子核物理から構成されています。原書ではこれに宇宙物理が加わりますが、これは一〇年前に出された本ですが、ハンガリーでは今でも高等学校で使われています。もちろん、すべての学生が使う本ではなく、大学へ進学する学生が読む本なのですが、日本の教科書のように堅苦しいところがなく、自然に物理が勉強できるようになっていきます。日常的な事例を例題にしていますので、文系の方でも読めるものです。もちろん、専門の日本の物理学者から見れば、厳密でないところや数学的証明が欠如していると言われるかもしれませんが、非常に面白い教科書だと考えています。ただ、「高校物理」と題されていますが、日本では指導要領があるので教科書としては使えませんし、大学では何故「高校物理」と題されているハンガリーの教科書を勉強しなければならぬのかと言われますか

ら、中途半端な存在になってしまい、日本ではあまり使われていないのです。

「異星人伝説」のなかに、二〇世紀初頭のハンガリーにおけるギムナジウムの教育は素晴らしかったという箇所があります。また、戦後の民主的な国家の中で、これに匹敵するのは日本の高校ぐらいだという指摘があります。これに関連して、日本の高校の先生から質問を受けました。ここにいらつしゃっている大学の先生方は別なのですが、一般に、日本の大学の物理学者はあまり教育に関心がありません。しかし、高校の方では物理教育に熱心な人が多く、日本で国際会議を開くにあたっては、高校の先生方をなるべく多く参加させるべきだと説得して、物理教育の国際会議を開いてきた経緯があります。その中で分かったことは、こうした高校の物理教育の中心になって

いる先生方の中には、名古屋大学物

理学科の出身者が多いことが分かりました。彼らはガリレオの山猫学会をもじった通称「野良猫 (Stray cats) 学会」という自主的なサークル、「愛知・岐阜物理サークル」を作り、高校の物理教育でもっともアクティブな先生方の集まりになっています。彼らはいろいろな国際会議に自分たちで製作した実験装置を持ち込み、面白い実験を披露するので、たいへん評判になりました。実験で見せれば、言葉の壁を破ることができるところです。以後、アメリカ、ヨーロッパ、中国で、彼らは引張り蛸になりました。

彼らの行動の基礎には、たんに物理学が発展すれば良いという考えではなく、人類の平和的な発展に貢献すべきだという考えがあります。こうした行動を生み出したのは、名古屋大学理学科の坂田昌一先生の影響があるのだと思います。当時、名古屋大学の理学科は日本でもつ

とも自由で民主的な雰囲気をもった理学科だと言われていました。大学を卒業して高校の教師になってみると、受験競争や実験装置の制約から思い描いていた教育ができる環境がない、そういう苦しみを味わいながら、そこから何かを作り出そうという気持ちが強くなり出そうと思えます。その点では、旧体制の制約のなかで苦しんだハンガリーの天才たちとも相通じるところがあり、それがハンガリーの高校教師ヘインパクトを与えたのではないかと考えています。その一つの事例として、愛知・岐阜物理サークルの高校の先生方を、ハンガリーの高校の先生方がハンガリー物理学会の名誉会員に推薦されたという経緯があります。高校の先生で博士号をもっていないかった川勝博さんが香川大学教育学部の教授に就任されたことには、ハンガリー物理学会の名誉会員であるということも役に立ったと思います。

現在、教員養成教育をはじめ多方面で川勝先生は活躍され、日本の大学教育改革にも貢献されていますが、マルクス教授やハンガリーの高校の先生方による温かい励ましと評価があったことは特筆に値すると考えています。

また、ここに出席されています小沼先生は、物理学会会長の時に物理学教育委員会を設置され、さらに学会の規約を変えて、物理学者がもっと教育に関心をもつべきことを喚起してくださいましたし、江澤洋先生は学会でいらつしやった時に学術会議の中に物理教育小委員会を設置し、学際的に物理教育を考えるようにしてくださいました。このお二人の先生は、一九八六年にアジアで初めて上智大学で開催された物理学国際会議にワークショップオルガナイザーとして、マルクス教授と一緒に活躍されました。その意味でも、マルクス教授の日本の物理教

育に与えた影響は非常に大きいと考えています。

この『異星人伝説』が出版されたことにより、若い先生方がマルクス教授の志を受け継いでさらに物理教育を発展させることができるのだと考えます。その意味で、本書の出版を歓迎し、感謝しています。

編訳者挨拶

盛田常夫

ご参集された皆様、本日はお忙しいところ、この会にお出でいただき、著者マルクスともども、御礼申し上げます。またセルダヘイ大使には、この会を主催いただき、たいへん感謝する次第です。

セルダヘイ大使とは、私が専門調査員で日本大使館に勤務して以来のお付き合いです。現職の日本の首相として、はじめて海部総理がいらつしゃった時に、私が経済大学での学生との対話集会を組織することになり、セルダヘイ大使には同時通訳者としてご協力をお願いしました。もう時効でしょうからお話ししますが、当時、対話集会なのに、首相官邸から事前に質問を集めるようにという指示がありました。総選挙を控え、失点を恐れた側近の考えだと思いますが、いくらなんでも対話集会なの

に事前に質問を集めることなどできないと思います、そのまましておきました。しかし、一行が日本を出発した後も、訪問先から「質問はまだか」と矢の催促があり、仕方が無いので私が七点の質問を作成しました。そうしたら、今度は回答も準備しろというわけです。

官邸は逐語通訳で時間を稼ぎたいという意向でしたが、同時通訳で臨場感をだした方が良いというわれわれの提案が通りました。そこで、前日に、セルダヘイ大使のほかに二名の日本人通訳者を集め、リハーサルをして本番に備えたというわけです。質問も回答も事前に分かっているのですから、本当の同時通訳ではなかったのですが。当日は、学生を学長室に呼び、七つの質問をはさみで短冊にして配り、順番通りに質問するように指示しました。

本番ではあまりにテンポが良く進化したために時間が余り、司会を務

めた友人のザライ副学長がさらに質問を受け付けたいと切り出しました。私はステージの袖で進行を見守っていました。その時に海部総理がギクリとされたのを覚えています。辛い難しい質問ではなく、この即興の部分はセルダヘイ大使がうまく通訳してくれて、すべてが筋書き通りに進んだのです。セルダヘイ大使とはこのようにお世話になった間柄です。

さて、本書の内容については、改めて説明することもないと考えますので、この本に託した私の思いをお話したいと思います。

この書物はいわば昔流に言うところの「偉人伝」の類のようなものです。もつとも、本書は俗流的な伝記とは異なり、本来の科学者の生き方や発見の方法を教えてくれるものです。そこで、この発見の方法ということについて、少し考えて見たいのです。私は文系ですから、数学や物理学

をきちんと学ぶ機会はありませんでしたが、大学院で集合・位相や抽象代数の講義を受けました。そこから一つの事例をとってみたいのですが、集合論の講義が進むと、カントールの無限集合の類別の話題には入りません。通常、数学基礎論では、集合の公理から始まり、無限集合の話題に入ります。ここら来ると、論理だけを追っていくのが、たいへん苦痛になってきます。数学を専攻しないふつうの凡人には論理だけで公理体系を辿っていくのはたいへん苦しく、その現実的な意味を掴むことがほとんど不可能になってきます。数学嫌いになるのは、だいたいこのような理由によります。

しかし、カントールが無限集合を類別しようと考えたのは、公理にもとづく論理的思考の積み上げの結果ではないと思います。非常に具体的な推測や発想から出発しているはず。整数の集合と有理数の集合は

無限集合として同値であるのか、連続体である実数の集合の濃度は、整数の集合より濃いのではないか。それなら、それをどのようにして類別できるのか。抽象的な理論が構成される前に、このような問題の発見や推測があるはず。これはいわば発見の方法（プロセス）です。つまり、公理体系が構築される前に、このような思考の営みがあります。

通常、科学的な発見は公理的な思考の積み重ねの結果ではありません。まず最初に発見があり、後から論理付けしていくのです。つまり、発見や推測がまずあり、証明は後追いです。だから、科学を勉強するにあたって、発見の方法が大切になります。

ところが、科学や数学の理論を教科書として仕上げる時には、逆にそのような発見の方法（プロセス）を隠して、あたかも論理一貫して発見されたかのような公理体系として提

示するのです。これが教育の方法です。それが教育の効率を上げることには疑いありませんが、他方で数学や科学にたいする関心を失わせることになります。

ここに、教育の方法と発見の方法の矛盾があります。とくに日本の学校教科書は、必要以上のことを書かず、非常に薄っぺらなものになっています。それで科学や数学に関心をもつことなど、不可能でしょう。そこで、『異星人伝説』になるわけです。そこには、生きた発見の方法が実験として語られています。この本から若い読者が読み取るべきことは、まさに発見の方法を知ることだと思ふのです。

今まさに科学教育の危機が語られています。それは何よりも、発見することの楽しさ、発見の不思議さが教授されないうちに、大きな原因があると考えます。このような意味で、発見の楽しさを知るために、

『異星人伝説』を多くの若い人々に薦めていただきたいのです。

最後に少し私的なことに触れさせていただきます。

今回の出版は、半ば、自費出版のようなかたちでおこないました。現在の出版状況のなかで、このような著書の出版を引き受けていただくところはありませんでした。しかし、何としても、この著書を出版したいという気持ちが強くなり、これまでハンガリーを「飯の種」にしてきた感謝の意味を込め、初版の出版リスクを私がとることで、これまでお世話になってきた日本評論社に引き受けていただくことになりました。

日本評論社には、コルナイの著書の発刊でお世話になったばかりでなく、『経済評論』誌や『経済セミナー』誌で長期にわたってコルナイの論文の連載をしていただきました。私の著書の刊行でもお世話になりました。そのような出版社に引き受けていた

だけ、これまでのお返しができるという意味でも、感謝しています。ちょうど、私自身、昨年四月に転職し、一八〇度異なる分野で仕事をすることになったことにたいして、一つの区切りをつけるという意味もありました。

本日の会には、私の方からほぼ五〇名余の招待者をリストアップしました。ご参集いただいた方々は、私がハンガリーにかかわる大きなキツカケやチャンスを直接間接に与えてくれた方々です。その意味では、ハンガリーの私的な同窓会のようなものだと考えています。簡単にご紹介を含めて、ハンガリーとの関係をご披露したいと思います。

何よりも、一ツ橋大学の倉林義正先生に「ハンガリーは面白いよ」と言われなければ、永遠にハンガリーとの関係はなかったと思います。そういうことがあって一九七八年末にハンガリーへ旅立ちました。

最初の翻訳『社会主義と市場』(一九八〇年)の書評を『エコノミスト』誌に書いてくださったのが、佐藤経明先生です。先生には今回の出版にあたり、出版社を奔走していただきました。

一九八八年に外務省の専門調査員、ハンガリーの初代専門調査員として再びハンガリーに長期滞在することになったのは、当時、東欧課におられた川合さんの推薦によるものです。最初の滞在当時、川合さんは参事官としてブダペストの日本大使館におられ、また六〇年代初めに語学研修生としてハンガリーでの生活を始められた外務省のなかでもハンガリーの開拓的な存在です。

専門調査員として赴任したときに、あの体制転換(東欧革命)が起きました。その最中に出会ったのが、野村證券グループです。当時、野村は東欧進出を計画し、他方ハンガリーは改革政策の策定と実行という課題

をもっていました。ブルーリボンコミッションという政策グループが結成され、ジョージ・ソロスを含め、内外の経済学者や実業家がメンバーになっていました。野村総合研究所にこのグループのファンディングメンバーとしての参加を打診したことから、野村グループとの関係が始まりました。一九九〇年三月には野村総合研究所の水口弘一社長がブダペストへいらつしやいました。今、野村総研の顧問をされていますが、水口社長にお願ひして、野村総研に移ることにになりました。

当時、野村ロンドンの会長でいらつしやったのが、中沢さん(現国際証券社長)です。その後、中沢さんは野村証券の常務として国際金融担当となり、それまで大和証券が独占していましたハンガリーのサムライ債発行で、野村証券が初めて引き受けることになりました。その端緒を開く仕事を一緒にいたしました。サ

イムラ債の発行引き受けが活発化した一九九五年暮れに、ハンガリーのホルン首相の訪日があり、野村証券がホスト役として投資セミナーを開催する榮譽を受けました。

ちょうどホルン首相訪日の直前に、私の郷里富山県の富山商工会一行が野村ツーリスト主催でブダペストに来るといふ奇遇があり、そこで知り合ったのが立山科学工業の水口昭一郎会長です。それがきっかけで、ちょうど一年前に、私自身がまったく違う世界に飛び込むことになりました。

本当に話せば長くなるのですが、このようなハンガリーにかかわる人の輪があつて、それで『異星人伝説』もこのように実現したといえるのです。本書の出版を契機に、さらにこうしたハンガリーをめぐる新しい人の輪が広がることを期待して、私の話を終わらせていただきます。